

世直し源さんの後悔

小倉 一純

おおあみしらさとまち

大網白里町を出た東京方面行きの列車はその日も満員で、渡部の父親は自分の立ち位置を探していた。

ようやく新聞を小さく開いた父親は、列車の急な減速に身構えざるを得なかった。直下の台車からは一瞬、鈍い振動が伝わり、それが車体を突き上げるような感じがした。

なぜか胸騒ぎがした。彼は、先頭車両に乗車していた。その後、列車は完全に停止した。一体、何が起きたのだろうか――。十五分ほど経過したところで、車内では、車掌のアナウンスが始まっていた。

「ご迷惑をおかけしております。先ほど、白里駅を出たところの踏切で、人身事故が発生いたしました。運転指令所からの連絡により、まずと、後ほど、前方より、代替の列車が入線いたします」

父親は、全開のドアにかけられた応急階段を用心深く踏みしめ、軌道の砂利の上に降り立った。と、彼の視線はより前方の車両下側

へ注がれた。

言葉では表現できないものが目に飛び込んできた。覚えているのは、何かの数個の塊と血の海であった。明らかにこれと分かったのは人間の頭部である。彼が歩を進め、反対側を覗き込むと、そこにはひとり息子の顔がのぞあった。乗客たちは、その様子を一瞥いちべつしながら、急ぎ足で父親の後ろを通り過ぎて行つた。空には入道雲が立ち上がっていた。月をまたぎ七月に入れば、近くの九十九里浜では毎年恒例の海開きが行われる。

渡部の亡くなる一年前、源さんは、もうひとりの友人である大原の実家を訪ねたことがあった。ひきこもりの彼を連れ出しに行つたのである。「お母さん、お金ください」といつて、驚く彼の母親に金をもらい、渋る彼と一緒にに街へ出かけた。家に戻ってみると、すでに彼の父親が帰宅していた。その父親に向かつて、源さんはいった。

「大原君は今、二十五歳です。二十五年かかってこんな風になったんです。よくなるのにまた同じだけかかるかも……」

「ふざけないでください、あんた。それだつたら、われわれが生きていけないじゃないですか」

大原は精神的な問題を抱え大学を中退していた。父親は、地位のある役人だが、浮気をしていた。一方、彼の母親は、美人で気が利き頭もよかった。そんな大原の両親は、息子である彼の気持を理解していなかった。

源さんは乱暴な口を利いたが、大原は大喜びだった。自分の人生に、生まれて初めて、風穴が空いたような気分になったのだろう。

彼は源さんを慕っていた。その代わり源さんは、宗教団体からは大目玉を食らった。越権行為もはなはだしいと叱責されたのだ。彼はただの信者だった。

そんな彼はこの頃、「源さん」と呼ばれていた。年齢は、三十代前半であった。三十年以

上も前の話である。『世直し源さん』という偏屈で正義漢の職人風情な男が主人公の漫画があったのだが、それに因んで、同じ宗教の間が彼に付けたあだ名だった。

源さんはその半年前まで、岐阜県恵那郡の串原村くしはらむらにある、標高七百メートルの山の農園に暮らしていた。宗教団体が運営する、自然農法の試験農場だった。そこに「耕福塾こうふくじゅく」という学び舎があった。現実にはそこで農業を勉強する傍ら弱った体や魂を癒す者もいた。渡部や大原もその耕福塾の塾生だった。

ところで、団体には、次期総長と目される人物がいた。人物の父親はかつて開祖の右腕だった。大学へは行っていない。代わりにブラジルの貧民街に放り込まれ、そこで民を救って来い、とその父親に命じられた。人物は、ゴキブリだらけの小屋をただで借り、そこを根城ねじろに布教を始めた。

結果が出て、ブラジルでは大成功を収めた。人物は、名古屋市の高級住宅街の屋敷に暮ら

していた。父親が遺したものだ。その父親が私財を投じて、この山奥に試験農場を開いていた。

そんなある時、人物が来訪するという連絡が入り一同は奮起した。源さんは、前の晩から自然農法産のブラジルコーヒーをドリップして冷蔵庫に入れた。季節柄、アイスコーヒーを提供する心積もりだ。当日は、いつもより念入りに学び舎などの掃除をした。神道というのは何よりもきれい好きだ。

高級車と思しきエンジン音が聞こえてきた。それは山道には相応しくない車幅でこちらへ登って来る。農園の学び舎の脇にその輸入車は停まった。出迎えの皆が集う中、人物は、左側にある運転席のドアを開けた。

「おはようございます」

人物を迎え、歓迎式典が始まった。源さんは早速、アイスコーヒーを給仕した。

その式典も終わり、源さんは学び舎で雑用をしていた。すると、車のところへ人物がやつ

て来た。私物でも取り出そうとしていたのかも知れない。源さんは人物の前へ足を運ぶとすかさず、

「なぜこんなに立派な車が必要なのですか？」と尋ねてしまった。

「うん。これは自宅の隣りで経営している幼稚園の持ち物なんだよ。それを借りて来たんだ。だから私の車じゃないんだ」

要するに車は法人所有だということだろう。

突然、背後に人気を感じた。

「源さん、総長代行に何て失礼なことを――」

「……」

「本当に申しわけございません」

あたりには数人いて、ちよつとした騒ぎになっっていた。

「彼はこれでも国立大学を出ているんです」

山の農園での騒動的一幕である。

源さんたち山の仲間、本部の祭典にも出かけた。それは伊豆の山中にあった。岐阜の山奥からその熱海へは、十一人乗りのワン

ボックスカーを源さんが運転して行った。

その日も朝早く起きて、一行は上りの東名高速道路を走る車中にいた。車は馬力が弱く快適とはいえなかった。勾配が続く静岡県の牧之原台地あたりでは、ディーゼルエンジンは青色吐息だった。大きな車内を冷やすエアコンも一台しか付いていない。窓を開ければ猛暑である。やがて相模湾が見えてきた。目の前には小高い山があり、その山道を登り切ったところに本部があった。

そこでは、お玉串たまぐしといわれる献金を、神様に差し上げる。源さんは財布を覗のぞいてみた。千円札と五千円札が一枚ずつしか入っていない。その千円では少々けち臭い。だが五千円では、財産の大半を持って行かれてしまう。神様はお優しいはずだ。二千元で勘弁してもらおう。白木でできた脚付きの四角い皿に五千円札を置いて、受け付けの職員の前へ差し出した。

「三千元、お釣りをいただけますか？」

源さんはいった。

「き、君ね、お玉串で釣銭をよこせなんていうのは初めて聞いたよ」

「済みません」

「ワ、ハッ、ハッ」

職員は笑った。

源さんは、山の試験農場では、総勢三十名の三度の食事の準備や雑用を任されていた。

神道だから、そこには「御神前^{ごしんぜん}」という部屋がある。正面に立派な神棚のある、それに続く広い座敷だ。そこで塾生は食事をとった。

源さんは時々、山を下りて買い物にも行った。そんな時はいつも渡部と一緒にだった。彼は二十代後半だ。源さんとは一番年齢が近い。

町に一軒しかないスーパーで買い物を済ますと、これもまた町で一軒しかない小さな書店で時間を潰す。グラビアアイドルはそこで見られない。彼らにとっては何にも勝るオアシスだった。店先のコンクリートの三和^た土^きで立ったまま本を読み、終わるとやはりま

た町で唯一のかわいい喫茶店に立ち寄った。

カラフルなビニールレザーのボックス席で、渡部と向かい合ってコーヒーを飲んだ。そんな何気ないことが、山奥で暮らす二人には、何よりも楽しみだった。

「渡部、ゆかりちゃんは元気？」

「この間、本部へ行った時に会ったよ」

渡部には、熱海の本部に好意を寄せる女性がいいた。だがそれは彼の一方通行の恋だった。

脳腫瘍の手術後の後遺症に彼は悩まされていた。渡部は脳の一部を切除していたのである。高校へは行っていない。予後が悪く進学することができなかった。普段は元気に振る舞っていた。努力して運動障害なども克服していた。ただ、体調が悪くなり、寝込むことも多かった。

耕福塾の就業年限は一年である。卒業した源さんは東京で会社員に戻っていた。

そんなある日、かつての山の仲間から電話

がかかって来た。渡部が亡くなったというのである。

渡部の父親は、名門女子大の職員だった。息子の回復を願い、房総の海に見える丘に家族で引っ越していた。列車は発車して間もなく緊急停車した。その後、人身事故の発生を告げる車掌のアナウンスがあった。

渡部は前途を悲観していた。彼にはもう父親の期待に応え頑張る術すべもなくなっていた。「お父さん、僕の気持ち分かってくれよッ」これが亡くなる刹那せつなの彼の気持ちだったのではないだろうか。

後で聞いた話だが、渡部は毎朝、父親の出勤時間に合わせて、近所へ散歩に出かけるのが日課だったという。

東京で仕事に追われ、気持ちの余裕もなかった源さんは、最後のお別れをすることができなかった。その時の源さんが現在の私である。

後悔の念は今も深く胸に残っている。